

私の長崎大水害

三井 信 恵 (長崎市仁田小学校)

「梅雨明けの雨にしては、よく降り続くものだ」と、自宅の部屋から、幾筋もの稲妻が走る薄暗い空を見上げながら考えていた。今になって思うと、それが、あの惨事の幕明けであった。

午後7時半過ぎ、停電になった。雨足は速く激しくなったが、私の家は高台にあるので市街地の騒ぎなど知るよしもない。暫く、点灯するのを待っていたが、いつまでたっても点灯する気配はない。ラジオをひねってみると、県北地方の被害のことを報道していた。更に暫くすると、西彼でのバスの立ち往生のニュースを伝えてきた。

その頃、電話のベルが鳴った。浜町アーケードの喫茶店でアルバイトをしていた弟からであった。中心部の2階の喫茶店なのだが、気付いた時は、水深1mはあったらしく、店の中の客や従業員全員が閉じ込められたと言うのである。また、電話が規制されて、連絡が思うようにとれないことも聞き、この時初めて、事の重大さを知った。そして、ラジオもいつしか、全てこの水害のニュースに占められ、中島川の石橋群のことが報じられた。あの「眼鏡橋」が流されたと言うのだ。石で造られたあの「橋」がである。とにかく、想像を絶するもの凄い力で、長崎の街が破壊されていることは確かなようだった。

朝になるのを待って、小雨の中、私はバイクで、当時の勤務先であった諏訪町の磨屋小学校へ急いだ。八つ尾町の自宅から思案橋へ向かう

間に、小さな崖崩れ^{がけくず}2ヵ所、思案橋では、水は引いていたが、暗きよのアスファルトが無残にもめくりとられていた。それから、磨屋小学校までの通りも、いつもの人通りが嘘のような静寂さ、そして、ヘドロ。辛うじてバイクを押して学校に着くと、これまた、壮観(?)であった。玄関には、近所の荷物(アイスクリームのクーラーボックス・原付バイク・自転車等)が漂着し、入口をふさいでいた。駆けつけた同僚の先生方と一緒に、荷物を動かし、中に入ってみると、廊下は波うったようにめくり上がり、床には棚、机、椅子等が転がっている。片づけようにも、あまりの悲惨さに、手も足も出ず、職員全員で立ち尽くしてしまった。

翌々日から、2階に臨時職員室を設け、復旧作業が始まった。赤ペンをストックやたわしに待ちかえりの奮闘であった。全職員で、泥の掃き出し、荷物の片づけ等に精を出した。そのうちに、父兄が交替で手伝いにきてくれたり、市内の教職員の応援があったり、長崎東高の生徒のボランティア活動があったりで、無事に清掃は終わった。その後、運動場が、付近のゴミ集取所になっていたこともあり、学校中を消毒してまわった。そして、業者の工事も並行して行われたので、復旧作業は8月末までに終了した。

そして迎えた9月1日の始業式。この朝講堂で聞いた校歌を、私は一生忘れることはできないだろう。